

群 教 セ	G09 - 02
	平26.254集
	英語 - 中

身近な話題を英語で書くことのできる 生徒の育成

—授業と家庭学習課題との関連付けを通して—

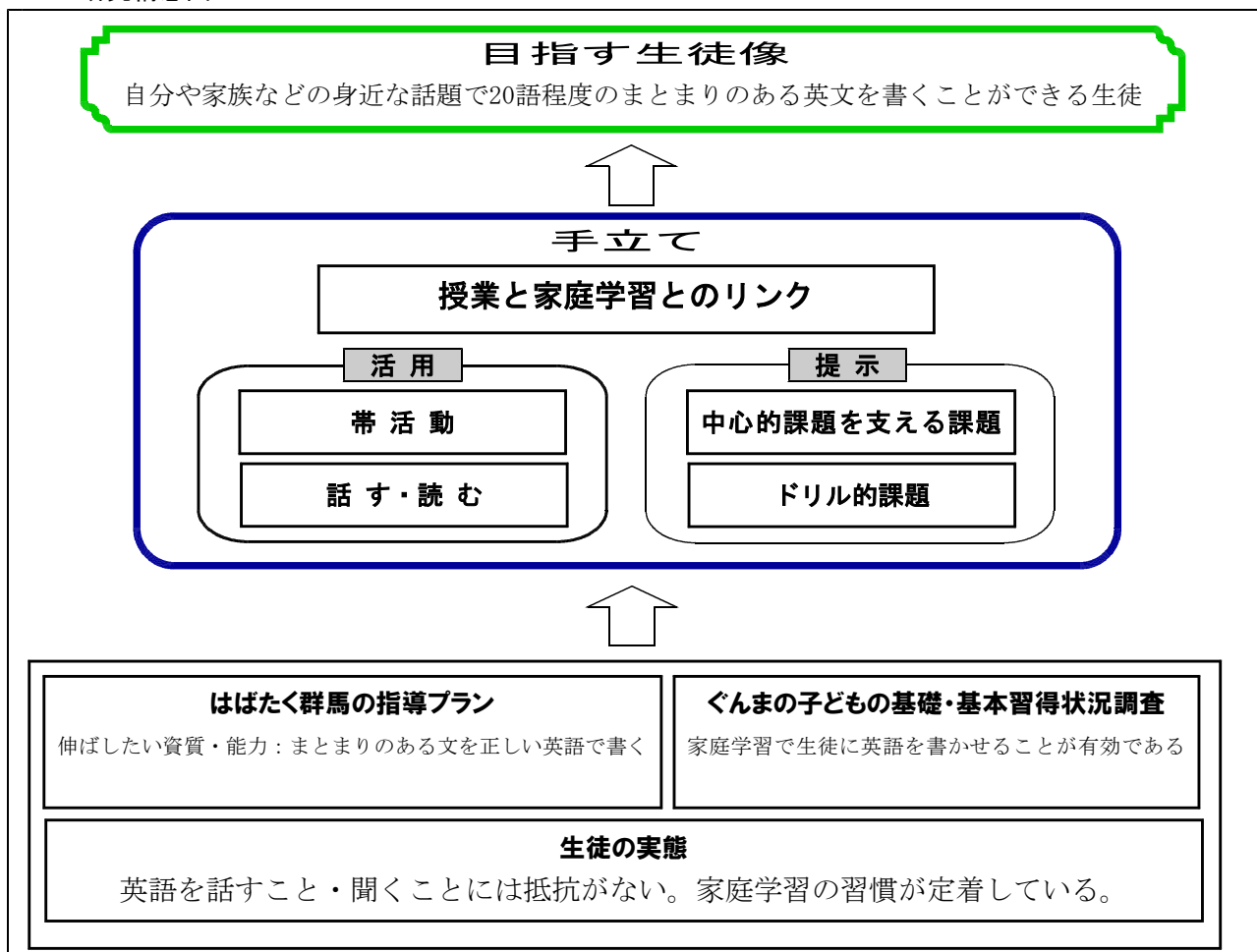
特別研修員 水落 浩章

I 研究テーマ設定の理由

中学校学習指導要領解説外国語編では、内容的にまとまりのある一貫した英文を書く力が十分ではないという課題が挙げられている。また、「平成24年度ぐんまの子どもの基礎・基本習得状況調査」では、「身近な話題について、自分の考えや気持ちをまとまりのある英文で書くこと」が課題とされている。質問紙調査の結果に対して、「生徒が家で一人でも自作の英文を書けるような工夫をして、家庭学習で生徒に英語を書かせることが有効である」との考察があり、モデル文提示の工夫や生徒同士の添削の有効性が提言されている。「はばたく群馬の指導プラン」においても、外国語で伸ばしたい資質・能力を「まとまりのある文を正しい英語で書くこと」としている。本校生徒は、英語を話すこと・聞くことには抵抗がない。英語を書くことにもつまずきなく取り組めるよう、家庭学習課題に工夫を加え、継続的・段階的に自己表現力を高めさせたい。提出された課題や作品を授業で生かすことが生徒の書く意欲の向上に繋がると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) 家庭学習課題の提示

生徒が家庭で一人でも英作文に取り組み、具体的な例文と語彙のリストを含んだ学習プリントを家庭学習課題として設定した。作成に際しては、以下の段階を経て生徒の表現力を高める工夫をした。

①ドリル的な課題

a 基礎の習得を目指したもの

自分や家族、友人、関心のある人物について、学んだ表現を用いて繰り返し書いて表現する。

b 学んだ表現の積み重ねを目指したもの

既習表現で書ける内容の英文に、新出表現で学んだ英文を加える。

②授業における中心的な活動を支える課題（①の課題を活かして取り組めるもの）

a 自分自身について伝えたい内容を、生徒は日本語で用意してくる。（1学期）

b 自分が紹介したい人物について伝えたい内容を、生徒は英語で用意してくる。（2学期）

c 自分の冬休み、正月について伝えたい内容を、生徒は英語で用意してくる。（3学期）

(2) 授業における家庭学習課題の活用

①帯活動

生徒が提出した課題を教師が読み上げ、人物クイズWho am I?（私はだれでしょう）で使用する。

②話す・読む活動

家庭学習課題で書いた英文を原稿として、自己紹介や他者紹介、クイズなどの活動を行う。例えば、クイズでは生徒が自身の作品を読み上げたり、教師が集めて印刷した友人の原稿を読んで答える。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 大半の生徒が家庭学習課題にまじめに取り組み、提出率が高かった。課題に取り組むことで授業に主体的に参加できた。生徒の実態（書く力、興味・関心）を踏まえた内容であったことも奏功した。
- 家族や友人など身近な人物についてスモールステップで繰り返し書いてきたため、基本文など大事な表現も身に付けることができた。
- 自己紹介や他者紹介など、まとまりのある英文を書く際には、それまでに身に付けてきた英文を積み重ねることで自然と語や文の数が増えるため、文章を書くことへの抵抗感も弱まった。
- 事前に家庭学習課題を通して表現したい内容を考えてくることで、授業で英文を書く活動が円滑に進行した。教師は英文特有の書き方の支援や語彙の補足に支援を集中することができた。
- グループでの添削活動では、生徒の教え合う（学び合う）姿が見受けられた。家庭学習を、授業の補足的な側面だけでなく、より良い授業を成立させるための位置づけとして生かすことができた。

2 課題

- 家庭学習課題は生徒の実態に適したものでないと授業の中で活かせない。言語活動によっては、家庭学習課題に向かない単元もあると考える。
- 家庭学習課題の作成には時間を要した。授業全体をデザインするつもりで、作成は計画的に進めていくことが大切である。

3 提言

- 英文を書く活動では生徒の取組に個人差が見られる。授業前の段階でその個人差を埋める効果が家庭学習課題にはある。
- 生徒が書いた作品は、発表会や展示という形で紹介することで意欲を高めるであろう。
- 家庭学習課題への生徒の取組を定着させるために、単元によっては読解に焦点を当てた課題を設定するなど、柔軟な対応が必要である。

＜授業実践＞

実践 1

1 単元名 「PROGRAM3 ウッド先生がやってきた」(第1学年・1学期)

2 本単元及び本時について

本単元では、一般動詞の英文(肯定文・疑問文・否定文)の理解と運用を通して、言語活動(読む・聞く・書く・話す)の充実を図る。本時は全9時間計画の第6時である。主人公である由紀の中学校に赴任してきたウッド先生が自己紹介をする。由紀たちはウッド先生に様々な質問をして相互理解を深める。

本時の学習に向けて、生徒は図1のような家庭学習課題PROGRAM3 No. 1～No. 3を通じて、一般動詞を用いて身近な人物を紹介する英文を書く練習を進めてきた。生徒は家庭学習課題No. 4を通じて吟味した自己紹介の内容を基にして、自己紹介文を作成する。



図1 家庭学習課題 PROGRAM3 No. 1

3 授業の実際

導入では、Warm upとしてクリスクロスを行った。ALTのDo you～?の質問に対して、生徒はYes, I do. / No, I don't. で答えた後に、さらに1文を加えた(図2)。本時のねらいである自己紹介文作りにおいて、生徒が学習してきた一般動詞を思い出して用いることができるよう、設定した。

例	
ALT: Do you play tennis?	
生徒: Yes, I do.	又は No, I don't.
↓ (1文加える)	↓
I play tennis.	I don't play tennis.
I play soccer too. など	But I play soccer. など



図2 Warm up クリスクロス

本時の学習課題を板書した後に、学習の見通しがもてるよう、ALTが自己紹介を行って生徒にモデルを示した(図3)。

自己紹介された内容をクラス全体で確認したのちに、自己紹介内容の構成について説明した。

[学習課題]
自己紹介文を(家庭学習課題を基にして)書き、発表会に向けて練習しよう。



図3 ALTIによる自己紹介

英文(自己紹介)の順序

- ①あいさつ
- ②氏名
- ③出身(今回は出身幼稚園又は保育園)
- ④自分自身について伝えたいこと、伝えられること
- ⑤お礼の言葉

④については、話題があちこちに移らず、まとまりを意識して一つの事柄に対して2文程度を続けて書くよう伝えた(図4)。また、ALTの目線やジェスチャーについても、どのような動作が印象に残っていたか生徒に尋ね、スピーチ



図4 内容のまとまりを意識させる

の際には有効であるので、自分自身の自己紹介でも採り入れるよう伝えた。最後に、生徒がいつでも確認できるよう、活動の進め方を黒板の隅に掲示しておいた。

生徒は家庭学習課題で書いてきた内容を元にして、自己紹介で伝えたいことを英文で書き始めた。辞書を開き、役に立つ例文を見つけ出して書き出す生徒や、英文の語順について教師に質問する生徒など、一人一人が前向きに取り組んでいた。

ALTは書き終えた生徒の作品を添削し、話題が関連性や発展性を帯びるようヒントを与えたり提案するが、盛りだくさんにならないよう配慮した(図5)。

例
 I like fruits. (私は果物が好きです) だけの場合…
 ↓
 I like strawberries very much. (私は苺が大好きです)
 など、話題が続くような英文をALTが提案する



図5 ALTの確認を待つ生徒たち

ALTの確認が済んだ生徒は、発表に向けて個別で音読練習を行った(図6)。英文に難しい語句のない生徒は、Read and look up(読むときに原稿を見ないで読む練習)を繰り返しつつ原稿を覚えようと努めていた。ジェスチャーを交えて練習する生徒も数名見られた。教師は、未習語句を抱えた生徒へ発音方法を伝えたり、自信が持てない生徒へ英文を読む際のイントネーションや区切り方を伝えた。



図6 音読の練習

4 考察

生徒は全員が家庭学習課題に取り組んできた。あらかじめ、自分が紹介したい内容を吟味して授業に臨んでいるので、書く内容に困り書き始めが遅れるといった活動の停滞がなかった。その結果、授業内で全生徒が英語での自己紹介を書き終えていた。

家庭学習課題の内容設定については課題が残った。生徒にとって、英文で自己紹介文を書く活動は易しいものであった。授業では、あまり長い時間を要することなく書き終える生徒が多かった。本時以前までに取り組んできた家庭学習課題を通して、十分に書く力の基礎は身に付いていたと思われる。本時で使用した家庭学習課題を、日本語ではなく英語で自己紹介文を書かせるものに変えてもよかったのではないかと考える。

また、自己紹介文を書き終えてALTの確認を求める生徒の待ち時間が長くなってしまった。ALTが生徒一人一人と内容に関するやりとりを通して、自己紹介文

話題の繋がりを意識して、まとまりのある英文を2つ書くことができた。

「スポーツ」…テニスはするけど水泳はしない。
 「好きな歌手」… B'zが大好きで、毎日聴いている。B'zのCDをたくさん持っている。



図7 生徒作品

がまとまりを帯びるよう、作品を丁寧に確認していた点が理由としてあげられる。図7のような紹介文を書き上げることはできたが、ALTとJTEの双方で効率よく確認に当たるべきであった。

実践 2

1 単元名 「PROGRAM6 由紀のイギリス旅行」(第1学年・2学期)

2 本単元及び本時について

本単元では、3人称単数現在形を用いた英文(肯定文・疑問文・否定文)の理解と運用を通して、言語活動(読む・聞く・書く・話す)の充実を図る。本時は全10時間計画の第8時である。主人公である由紀がイギリスにホームステイをする中で、ホストファミリーのジュディやマットとシャーロックホームズについて話す。本時の学習に向けて、生徒は図8のような家庭学習課題PROGRAM5 No. 1~No. 4及びPROGRAM6 No. 1~No. 2を通じて身近な人を紹介する英文を書き、段階的に3人称単数現在形を用いた英文を書く練習を進めてきた。本時では、事前に家庭学習課題No. 3で書いてきた英文をグループで添削し合ったのちに、人物紹介クイズを作成する。



図8 家庭学習課題 PROGRAM5 No. 2

3 授業の実際

導入では、図9のようにALTによるクイズ“Who is this?”(こちらはだれでしょう)を例題として生徒に提示し、複数の生徒を指名して解答させたが、すぐに正解を教えずにクイズはそのまま続けた(図10)。すべてのヒントを生徒に聞かせることで、3人称単数現在形の英文を紹介するねらいがあった。

[学習課題]

身近な人物の紹介文をグループで完成させて、クイズにしよう。

正解の人物を確認したのちに、本時の活動の進め方をALTが英語で説明し、学習の見通しがもてるように



図9 ALTからの出題



図10 小声で解答する

した。その際、生徒の理解が深まるよう、ALTの作品例を用いて以下のように具体的に説明した。

- ①生徒は3人班を作る。
- ②ALTが作成したある人物(アニメキャラクター)の紹介文を黒板に掲示する。
- ③ALTとJTEで文法上の誤りがないか点検する。JTEは、3人称単数現在形のsが欠落している動詞や、日本語の固有名詞でローマ字表記が間違っている箇所を指摘して修正した。
- ④クイズ作りに向けて、ALTとJTEで相談して、ヒントとして読み上げる英文の順番を決める。
- ⑤ヒントの順番が決定したら別紙クイズシートに清書する。
- ⑥紹介文の隣に、Who is this?で使用したヒントの英文を掲示する。対応する英文同士をALTがマーカーペンを用いて線で結び、紹介文とクイズの関わりを理解させる。
- ⑦クイズシートが完成したら、発表会に向けて音読練習に進む。Read and look upを意識して取り組む。

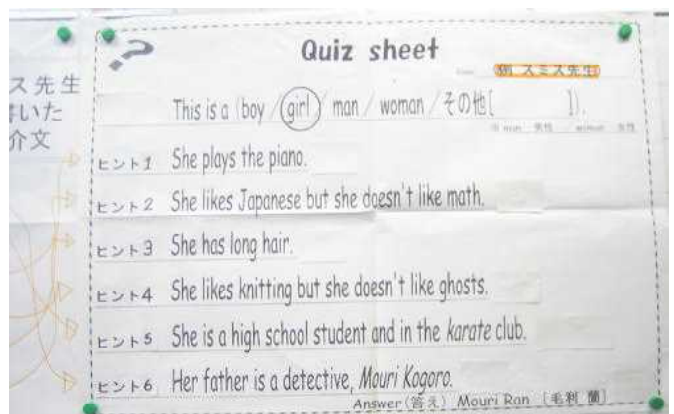
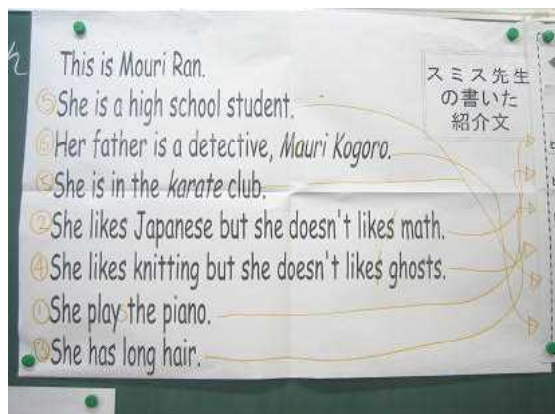


図11 添削を終えた紹介文の順番を、よりクイズらしい順番に置き換える

ALTの説明後は、生徒の理解度に応じて JTEが日本語で補足し、黒板にも「活動の進め方」を掲示した。

生徒は3人班を作り、お互いの家庭学習課題を持ち寄って添削を開始した(図12)。家庭学習課題を班内で回覧し、班員が書いてきた英文に文法的な誤りが見つかれば訂正した。家庭において一人では英文に直せなかった箇所を協力して直し、完成させた(図13)。



図12 課題を交換して読み合う



図13 添削活動の様子

辞書を使用して有用な例文を参考にしたり、班員を手助けする生徒も見られた(図14)。辞書に載っていない日本語の固有名詞はローマ字表記でよいこととしたが、時間のある生徒は英語での表現に取り組むよう助言した。



図14 辞書を用いて班員を手伝う

JTEは、家庭で書いてきた英文が少なかった生徒を中心に支援した。話題が思いつかない生徒に対しては伝えたい内容を一緒に考えたり提案した。準備ができていない生徒に対しては、英文作りを班内で協力するよう伝えた。ALTはクラス全体への机間支援を行いつつ、質問する生徒へ対応した。

添削が終了した生徒は、ALT又は JTEの最終確認を経たのちにクイズを作成する。クイズが聞き手にとって興味深い内容に構成されるよう班員の意見に耳を傾けつつ英文にヒントの順番付けを行い(図15の下段左端の数字)、別紙クイズシートに清書した(図16)。その際に新たな英文を思いついたら追加しても良いこととした。

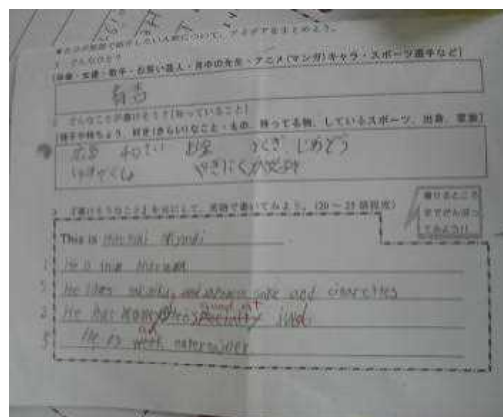


図15 各英文の左端にヒント番号を記入する

清書が完成した生徒は、発表に向けてRead and look upでの読みの練習に移る。教師は、発音やイントネーションなどの机間支援を行った。ここでは英文を覚える事を主目的とし、内容が周囲に聞こえない程度の音量で練習した。

4 考察

ほぼ全員の生徒が課題に取り組んで授業に臨んだ。家庭学習課題に書いてきた英文の分量には個人差が見られたが、生徒は自分の思いを英語で表現したい意欲に後押しされて、各班で協力したり辞書を活用して自分たちなりに英文を書きあげていた。また、教師に積極的に質問する姿も見られた。

生徒が伝えたい内容を明確にもっていたことや、紹介文作りの土台となる英文を家庭学習課題PROGRAM5 No. 1~No. 4及びPROGRAM6 No. 1~No. 2を通して書き慣れていたこともあり、教師の支援の対象となる事項が絞られた。その結果、教師の支援も効率的になり、時間も短くなった。

班活動では、生徒同士での添削がよく機能していた。今後は、お互いが書いてきた英文の内容に関する話し合いを支援したい。もっと知りたいことや情報の追加など、生徒同士が英文を加え合える段階にまで活動のレベルを上げたいと考える。

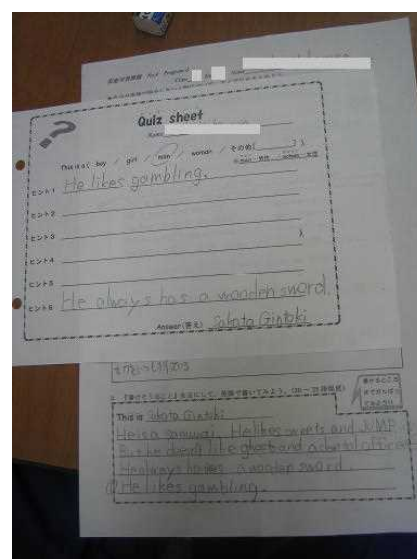


図16 クイズシートに書き写す

